

## 2. 0

衝撃的事実が公表されましたよ、奥さん！ こりやあもう、頭ン中いつでもハッピーセット（レイいわく）の俺でも衝撃的事実で、もお、もお——あーっ！ オーバーキャパシティッ！ 容量が無くなって色々理解出来なくなってきたぞ！？

とにかく、冷静にまとめめる事にすると……この場所は確かにバンド部の部室で、全く問題がないんだが、部員は目の前で脚を組んで微笑みを投げかけている優男（俺目利き）、羽須美七夜センパイだけであって……。あー、もお、面倒だ。誰かこの状況を簡単に説明してくれ！ と言いたいんだけど生憎俺と部長さんしか部室に居ない状況だ。

どう云う事さ？ 視たままで判別するとこの部活はほぼ潰れかけて事になるんだけど……もしかして、本当に？ マジで？ バンド部って、マジで潰れる五秒前とか、MTG——Majide Tsubureru Gobyonae——とかデスクか？ ああん！ もおワケわかんねーっ！ 潰れんのー？ ねえ、この部活潰れるワケー？

「いやまあ……このまま部員が十人集まらなければね」

「十人って事は……あと八人デスクいい！？」

無理くせーっ！ そもそも、今日この時点でバンド部に顔を出している人間が俺だけって事は、他の新入生は別の部活に顔を出しているか、帰宅部と云うフリーダムな部活に入っていると云うワケだなん畜生。部活をやらなくて何が青春かッ！

しかし十人って、結構多くね？ 普通の学校とかだったら部活動って、四人とか五人とかで活動すれば良いんじゃないの？ 野球とかサッカーとかの運動系部活なら話は別だけど、バンドは別に九人も十人も居る必要性はないワケだし。基本、三人組ならイケるんじゃない？ ——と、考えたワケなんだ

が、案外そうもいかないらしいとは、部長さんの言葉。

……この学校が普通とは違う、芸能人とかが通う学校ってところに何か意味でもあるのかね。疑問は疑問を呼ぶよ。

「まあ去年の話を一年生にしてもどうしようもないけど、理解するには必要だね。じゃあ、語ろうか」  
どうぞどうぞ。あ、一応俺にもわかるレベルでお願いします。

「それは少し難しいな……」

あ、そうですか。まあ良いや、何とか理解して視せます。何とか。大事な事なので二回言いました。

——話は、去年の後期からの話になる。

「現在の中心生徒会長である織部イザベラは、当時の生徒会長であった四年生の人間を蹴落として、自分が生徒会長になったんだ」

ははあ、あの残虐メガネ鬼畜野郎（視た目判断）、そんな事をして上にのしあがったってワケか。そうそう、そういうばこの学校は四年制で、四年間学校で授業を受けて、大学には二年生からの編入になる変則式の学校だったなあ。

思い出しながらも、部長さんの言葉には常に耳を傾けておく。何も知らないままにバンド部が潰れて貰っちゃ困るし、潰すワケにもいかねーし。俺の青春の場所を、たかが生徒会長とか云う肩書を持っていただけの鬼畜メガネに奪われてたまるかあッ！

とまあ、偉そうに申しましたけれども、今冷静に考えてみると……パンフレットいわく、この学校は生徒会中心学校でありまして、生徒会長に逆らうやつは学校の異端児で抹消されちゃう気がする今日この頃です。

「そしてまず、彼が打ち出したマニフェストは、部に活に賭ける資金の縮小と、部活に対する制約の数を増やす事だった。歴史の浅い学校だし、それに資金団体がいくらあの深田グループだとしても無限大に資金があるワケじゃない。現に、織部がこのマニフ

エストを実行しなければ、資金不足で潰れている部活はもっと多くなっていたはずだよ」

……ん、それだけ捉えると、アイツって話は長いけど意外に良いヤツなのか？ ちゃんと生徒の事を考えてやっているワケか。それでも、やっぱりやりたい事を否定されるのは好きじゃねーな。バンド部が潰れて貰っちゃ困る。

ま、ここまで聞いたところで、少し整理をしてみると、つまり、学校の財政を何とかする為に、部活として成立するハードルをあげた……って事か？ お、今日の俺はそれなりに冴えているぞ！

面倒くさい事をしてくれたなあ、あのメガネ、ガネメ。それが必要だとわかっていても、まさか大人の都合に子供が合わせるなんて事をするとは思ってもみなかったぜ。普通、そこは校長とか理事長とか、その辺の人が何とかするところでしょうよー。そもそも、学校の運営ってそんなに金掛かるのかよ。

「この学校の場合、敷地面積以上の資金が掛かっているんです。何せ、地下施設がありますから」

「へ？ 地下施設？」

パンフレットを徐にバッグの中から取り出すと、施設紹介のページに合わせる………けど、地下施設なんて云う用語は、一文字もでないなかった。本当に地下施設なんてあるのかよ。

「ええ。この学院は元々研究機関もかねそろえています。またから。下の方には別空間が存在していますよ。」

関係者呼んで、『セントラル・フリーモ』  
うわー、中二くせー。名前のセンスがもう中二丸出しじゃん！ 俺だったら、もっと良い名前を着けるね、着けられる自信があるもんね！

それより、かねそろえていた、って事は、今は起動していないのか？

「そうですね。数年前に機能を停止して、今では生徒会室がセントラル・フリーモの入り口になっている程度です。……ですけど、広大な空間ですからね、破壊するのにも、相当の費用が掛かりますし、

何より同じぐらい相当の資金を使って建築したんですから、いつか役に立つと言って、話をまとめているんでしょう。——結果、莫大な維持費が掛かり、学校の資金ふりが悪化して、現在の織部くんみたいな事になっている訳ですよ」

ははあ、そのセントラルなんちゃらをどーにかこーにかすると、資金ふりが元に戻るんだな。

「恐らく」

でもなあ、そこまでの気力——てか力は、いっぱいしの生徒には無いワケだし、パンフレットに載っていないって事はシラを通されると地下施設の事なんて全然話を聞いて貰えないだろうな。文句を言ってももみ消されるし、事情をわかっていない人間に協力を求めても、多分駄目だろうし……。こりゃ、正当法で十人集めた方が手っ取り早いな。

十人、か。残り八人。まアレイは何とか連れてこられるとして——問題はブランシュかあ。もう文芸部に入っちゃったかなあ？ パンフレットの文芸部も、バンド部のこの部室のある階と同じところにあるんだな。

いよっし！ いっちよ、行ってきますか！

「じゃあ俺部員集め行ってきますっ！」

高らかに宣言すると、部長の目が点になる。そしてすぐに輝きだし——

「ほ、本当かい？」

「ええ！ 俺だって、バンド、したいですから！」  
そうと決まれば、行ってきまーすっ！ まずはブランシュから勧誘だア！ バッグを持って、走る。何せ部員を集めるだけで、終わってしまうかもしれないから、一足先に帰ってもらっていても結構ですよおー、部長！

部室を出て、走ると……お、あそこか、文芸部は……人が三人ほど居るけど、いいや！

「ブランシュ……っ！ 助けてエー……っ！」

一気に文芸部の部室にダイヴ——って、アレ？

部室の中の光景を視て、俺も、そして恐らく俺の後ろに居る三人の生徒も、同じ事を考えたと思う。

そりゃ、吃驚もするわね。

そこには、部員わずか五名の人間しか居なかったんだから。おい、ここもかよ。

「……えーと……ブランチュ？」

「なに、アリス」

「……この部活って——」

「潰れかけ」

おいおいいいいいいい！ ハッキリ言いやがったなああああ！ ほら視ろ、だからバンド部に来いって言ったじゃねーか！ 今でも遅くないぞ！ バンド部に来いって！

「嫌。それに……おれ以外にも部員、来た」

あん？ あー、そういや忘れてた、後ろに三人居たの。同じ一年生だよねー。キミたち、バンド部こないいいいいいい？ 十人集まらなくてさあ、あと八人欲しいんだよ。

「え！ でも僕……楽器なんて出来ないし、人前で何かをするのもちよつと……」

「わ、私も人前ではちよつと……」

のおおおおおおおおお！ だつめだああああああああ！ この女の子とか、マネージャーでマスコットとか考えてたのにいいいいいい！ あー、でもこの男の方も、男のクセに女顔でちよつとカワイイ——って、あぶねー。

視線を横に向けると、ヘッドフォンをして、バンドナをして……ラップ口調で何かを呟いているヤツが。こいつなら、バンド出来そうだな。

「のう、みいはふりいだむに生きるのがモットーだぜい。ノット、ノット、ノット。バンド部ノット」

「あ、カチンと来たー……」

こいつ、何かすげえムカつく。個人的に、メチャクチャムカつく。でもスカウトしてえええええ。コイツ、一日中ラップしてるような人間だろうが。

「あ、そうです。僕もまだ知り合って一日も経って

いないんですけど、ラップで物事を決めるような人です」

ほらみる！ つまりコイツ音楽で生活しているようなもんだぜ！？ 絶対に使えるって、気に食わないけどスゲーヤツだつて！ 絶対に！ 絶対の絶対に！ 俺が言うんだぜ、絶対に間違いない。

でも超絶に断っているのは色々ありそうだな。ラップで生きているとか、完全に音楽の人間なのに音楽をしないと、まず、ありえない。したい事が出来ないなんて、耐えられないね。

……本当に、本当にお前たち駄目なの？ だつて、さあ、この部活も潰れかけですよ？ えーと、何人だっけ？

「この二人を含めると……七人。コイツも入ると、

八人——」

八人、かあ……。ん？ そうだ、部長さんはどこだ？

「ああ、私ですけど……」

「貴女が文芸部の部長さん？」

ロングヘアをポニーテールにまとめ、明らかに体育の人がそこに腰に手をあてながら立っている。胸のリボンの色は緑で、四年生を現している事が理解出来る。

へへ、俺、良い事考えちゃったもんね……

「良い事？」

ああ、だつて、部長さん、この部活潰したくないでしょ？

「ええ、まあ」

なら……合併と行きましようか。

「合併！？」

「文芸部は五人で、一年生が現時点で、ブランチュと、この三人。——まあ、キミが入るかどうかは別として、居るとしたら三人。つまり文芸部は今今の時点で、八人で二人足りない状況下におかれているわけですよ？

そんなもって、俺たちバンド部は、二人しか居な

い——あとは簡単な足し算ですよ。8+2は、10でしょ？」

つまり、完全な合併じゃなくても、一時的でも手を組んで、部活を存続させる事が今は重要なんじゃないかって、話ですよ。このままだと、文芸部も、バンド部も潰れちゃうし、どちらもそれは望んでいない。……俺、間違った事言ってる……？

しばらく文芸部の皆さまは考えているようですけど、やっぱり、ここは一旦手を取らないと、冷酷非道あの鬼畜メガネ、ガネメに活動場所取られちゃいまっせ。そうになったら最後、俺たちはバンド活動する事も出来なくなっちゃう！」

「でも、それって、だます事になるんじゃないか……」  
後ろに居る女顔の男が恐る恐る訊いてくる。——とか言われちゃってもさ、結局そうでもしないと挽回のチャンスもないワケよ。

「——あ」  
そこで何かを思い出したかのように、男は顔を下にする。

「……少女漫画研究部！ 今日生徒会長さんが廃部にしたんです！ このままだともこもすぐに……っ！」

『ええ————っ！』  
「ちよ！ そう云う事早く言えって！ 拙い！ 部長、早く決断しやがれ！ こっちも部長さん連れてくる時間が必要だからよ！ えーと、キミの名前は……」

「僕、二ノ宮リンって言います」  
「そうか！ えーと、面倒だから、リン！ それっていつの話だ？」

「ついさっきの話ですから……十分かそこらの話だと思いますが……。色々、備品とかを持っていく都合があるから———そうだ、まだ椅子とかテーブルがあったんで、もう少し時間が掛かるとは思いますが」

少しは時間、あるってわけか。それでも、多いワ

ケじゃない。早い内に手をうたねーと、拙いって事か。穏やかじゃねーな！ つか、俺学校に入学してから一日も経ってねーのにどうしてこんな事になっているんだ？ 超高速でトラブルに巻き込まれているような気がするぜ。

———つーわけでとにかく、聞いたでしょーが部長さん！ もう、迷ってる暇はねーぜ！

「わ、わかったわ！」

「おっしゃあ！ じゃあ部長連れてくるから待ってやがれ！」

「あ、待って！ 部活名はどうするの？ バンド部で行くの？ それとも文芸部名目で行くの……っ！？」

走り出していた体を突然止めた為、ちよっと壁に激突しかける、あぶね。

しまった、そこまでは考えていなかった。どっちかにしておかないと、怪しまれるし、合併しましたー、何て言ったら速攻で殺される気がふんふんするぜ。それがわかってるから、部長さんは今の言葉を投げかけたんだろうな。

どうするかね、部長さん。

「いや……でも、文芸部は文芸部じゃなくても、活動は出来るワケだし……」

「じゃあバンド部か？」

「そもそも、二つが同時に存続しないと、駄目じゃない」

「——あ」

「そうか……合併する事がされると拙い。けど、俺の提案だと、どっちかの部活しか助からないってワケか……。拙いな、色々と拙い事になってきた。時間もないのに、こんな難問を突きつけられるとは。どっちも犠牲は望まないし、どうしようもない。同じ部員だって事はばれるから別々の場所でやる事は難しいし。」

……ちくしょーっ！ やっぱり合併は無理なのか！？ でもバンドは続けたいし、この人たちは文

芸を続けたいと思うし。うおおおおおおおおお  
おとおお、やべええええ俺の頭ン中オーバーヒー  
トする！ これ以上頭使うと壊れる！ マジで！

ちよ、ブランシユも何か考えてくれよ！ さつき  
から本を読んでばかりで何も意見言ってくれねーじ  
やねーかよ！ 俺たち三人の中だと作戦参謀だ  
ろー？

「……いつからおれはそんな役どころになったんだ  
よ……」

「今さつき」

「……」

それは呆れているからの沈黙なのかい？ ええ？  
それだったらちよつとへこむわ。

「諦めるが先決。……おれたちの部活は、あと二人。  
集る必要はない」

むっかあ……ブランシユ、マジで文芸部なのかよ。  
バンド部に来る気はねーのかよおう。俺たち、友達  
だろ？

「……」

お、少し考えてる。ちよつと良心が痛む方法だけ  
ど、やっぱり友達だろう作戦は効くなあ……。こい  
つが入ると、ボーカルの歌とかの作詞が凄く簡単に  
完成するんだよな。しかも何気なく、キーボードと  
か打てるし。つまり、楽器のキーボードも、SPC  
のキーボードも打てる指の扱いはプロレベル！ さ  
すが作戦参謀、指先を使うデジタル器具には強い。

一刻も早く、こつちも十人揃えないと拙い状況だ  
し、部員を集めるのに手段を選んでる暇はない。  
バンドやりたい……それだけなんだよ、な！？ プ  
ランシユ！ 頼むよ……！！

「少し、考える」

「え、マジで？」

「……それよりも、もう、この作戦は無理……だ  
ろ？」

う、まあ、そうなんだけどな……せめて、生徒会  
長が来る事を遅らせる事が出来れば……

「……正当法。こうなったら、活動出来ると思わせ  
るしかない……」

ははあ、そうくるか。そういえば、この学校って、  
入部届けの日っていつなんですか？

「え——えーと……確か、入学式から二週間以内  
のはずだけど」

先輩の話に少し安堵。ん？ じゃあ、何で期限も  
待たずに少女漫画研究部は潰されたんだ？ どんな  
に潰れかけの部活でも、規律を守る生徒会長が期限  
を待たずに部活を潰す事なんてあるのか？

——と、そこで、文芸部の部長さんが悪い出し  
たかのように、あ！ と、小さく叫びながら、手で  
相槌を打った。

「そうそう！ 少女漫画研究部は、部員が二人で、  
しかも予算を遥かに超える資金で漫画を集めていた  
から生徒会長にイエローカードだったんだ！ それ  
で今回、レッドカードを貰ったから廃部になった、  
と！ 部員も足りなかったし、織部くんの規則にも  
引かかった……そりゃ廃部にもなるか……」

えー……それって早く言ってくださいよ。つまり、  
今日一般の部活が廃部になるワケじゃないんですね。  
よっし、まだ希望の光が見えてきた。

リミットは二週間。その間に、何とか部員を集め  
ないと拙い。八人、か……えーと、学校に来るのが  
一週間で五日だから……二週間の内に学校へ来る日  
には十日間あるワケであつてえー、一日平均0・  
8人入部させれば良い。四捨五入して、一人。一日  
一人をノルマに、走り回るしかねえ！

うーし、明日から忙しくなるぞお！ 今日俺が  
入部したからノルマはクリアしてるし、明日もまた、  
バンド部に入部出来るような帰宅部を探さねーとな。  
運動部はもう殆どの人間が入学してからすぐに入る  
のが一般的だし、それを目標に、一日でも多く練習  
をするってのが運動部の考えだからな。……バンド  
って、どちらかと云うと、運動ってよりは家の中と  
かでするインドア部活だからな、無所属の帰宅部で

もギターを弾けるヤツとかキーボード、まあドラムとか出来るヤツ、居るだろう。

希望の光も見えてきたし、部長にも報告しないと。とりあえず、今日帰るまでは部長と二人で合わせてみる事にするか……ギター、もう一個あるかなあ。

手に持っていたバッグを肩に掛けて——よし、じゃあ、お邪魔しましたー、てか本当にお邪魔しましたー、ごめんなさい。土下座でもしたい勢いなんですけど、面倒なんで、じゃー！

「あ、待ってください！」  
ん？ なんだい？

後ろを振り向くと、そこにはリンが手を出して、制止のポーズを取っていた。

「バッグから、何か出てますよ……これ」  
手のひらにある綿毛状のモノ……あ！ ウサぴよんの中身か！

「あ——可愛いぬいぐるみ……でも破れてますね」

「そうなんよおー、レイって凶暴な野獣がぶっ壊してくれてさあああっ」

「そうなんっすか！？ か、可哀そうに……あ、じやあちよつと待ってくださいね」

——？ 首を傾げて、俺はリンの行動を見守る。文芸部の部室の中に再び入って、懐から現れたのは

——ソーイングセット。も、持ち歩いているのかよ、それ……ビックリだぜ……。ミニソーイングセットと書かれた透明な箱の中から白い糸と、針を取り出すと、器用なもので、一発で針の中に糸を通す。もしかして、直してくれているのか？ 俺のウサぴよんを……

それは確かなようで、目の前でウサぴよんが……レイのせいによってバラバラに近かったウサぴよんが凄まじい勢いで直って行く。

「手際良いね、キミ」  
部長さんもビックリのテクニク。あんまりにも

高速の出来事で他の部員も思わず見とれてしまっている。

カップラーメンが出来るか出来ないかの時間で……口を使って糸を切る音が部室に響く。——おお……っ！

「完成です。でもやつぱりちよつとヤワかもしれないので、今度、もうちよつと頑丈にしますね」

「う、ウサぴよんが……ウサぴよんが直った！」

ハ●ジー————、ク●ラー————っ！  
ウサぴよんが直ったああああああああ！ 憎きレイの一撃より、地獄の底から舞い戻ったウサぴよん！ よかったよおおおおお！

ほんっつととうにありがとう！ リン！ オマエ良いヤツだ！ 本当に良いヤツだ！

「いえ、僕もぬいぐるみ好きですので」  
「なんだって……ここに、『ぬいぐるみ大好き連盟』が組まれた……」

「おおー、良かったです。僕も同志と出会えて良かったっす」

「この恩は忘れねえ。いつか絶対に返すからなあっ！」

行くぜウサぴよん……俺たちのサクセスストーリーの為に、まずは部員集めからだぜ！